

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧(1)

※視点番号は252頁を参照。

No.	名称	も	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化						解説
						1	2	3	4	5	6	
1	当麻曼荼羅図	◎									●	縦394.8cm、横396.9cmの大幅で、奈良県当麻寺に伝わる根本曼荼羅の転写本である。図様は『龍無量壽経疏』にもとづいて描かれたもので、中央に阿弥陀如来、左右に普賢菩薩、観音菩薩の三尊を中心に極楽の世界を表現している。図の下辺の九区画には、九品来迎図が描かれ、その中央の区画には銘文が書かれているが、本図では文字が欠落して一部しか書かれておらず、原因からの転写本とみられる。制作は、16世紀後半から17世紀前半の絵師系と推測される。市指定。
2	仏涅槃図	◎									●	絹本着彩で、丈167.7cm、幅172.8cmを測る。中央の宝台に頭を左にした釈迦が横たわり、周囲には摩耶夫人、諸菩薩や天部、弟子達、動物達の姿が多数描かれている。本図の制作年代は、鎌倉時代末から南北朝(14世紀前半)と推測される。市指定。
3	赤穂の製塩用具	◎			30						●	瀬戸内海沿岸地域では広い砂州と潮汐干満の大きな差を利用した入浜塩田が盛んに行われてきた。この資料は赤穂市域で使用されてきた製塩用具等一式を収集したもので、入浜塩田がほとんど見られなくなった現在では貴重な民俗資料である。国指定。
4	義士墨跡並びに富森助右衛門筆記	◎			1						●	『義士墨跡』は討入後熊本藩細川綱嗣邸に預けられた大石以下の義士から、同藩家中堀内伝右衛門が所望した手紙を張り合わせて一巻としたもの。討入の状況を当事者が記したのとして最も詳しい。市指定。
5	井口半蔵・木村孫右衛門連署起請文	◎			1						●	旧浅野家中の井口半蔵と木村孫右衛門が連署で大石内蔵助に差し出した起請文である。当史料は討入に参加しなかった者に返却された起請文であるが、赤穂事件にかかわる唯一の現存するもので貴重資料である。市指定。
6	赤穂浅野家藩札銀拾文目札	◎			1						●	浅野長矩時代の延宝8(1680)年1月に発行された藩札。浅野家は元禄14(1701)年に改易となったため、21年間だけ通用したもので、札の表には「播州赤穂 延寶八(1680)庚申歳 正月吉祥日 銀拾文目」とある。藩札は銀10匁、銀1匁、銀5分、銀3分、銀2分の計5種類が発行され、厳しい専一流通が強制されていた。改易時の藩札発行高は900貫目、引替えにあてうる銀の現有高は700貫目であったため、速やかに6歩替えて回収、回収した藩札はすべて城内で焼却処分されたため、現在確認できている藩札は全国で5点のみである。市指定。
7	赤穂浅野家藩札銀式分札	◎			1						●	浅野長矩時代の延宝8(1680)年1月に発行された藩札。浅野家は元禄14(1701)年に改易となったため、21年間だけ通用したもので、札の表には「播州赤穂 延寶八庚申歳 正月吉祥日 銀式分」とある。藩札は銀10匁、銀1匁、銀5分、銀3分、銀2分の計5種類が発行され、厳しい専一流通が強制されていた。改易時の藩札発行高は900貫目、引替えにあてうる銀の現有高は700貫目であったため、6歩替えて回収、回収した藩札はすべて城内で焼却処分されたため、現在確認できている藩札は5点のみ。市指定。
8	新町地藏(石仏)	●			4 29						●	加里屋の新町公園の東南隅に五輪塔の水・火輪や宝篋印塔の傘を交互に積み重ねた塔をはさんで、2体の石仏が祀られている。向かって左の石仏は板碑に彫られている。彫り方から南北朝末期〜室町初期のものと思われる。向かって右側の石仏は、欠損部があるが南北朝期まで遡る可能性が高い。この石仏は以前この地にあった薬師堂のもので、もとは高山の岩屋寺(薬師屋敷)にあったが寺の移築に伴い移されたものといえられている。
9	新町延命地藏	●			4						●	新町公園内にある、像高129cmを測り大正5(1916)年造立の丸彫り半跏像。もともとは薬師堂内に安置されていたが、薬師堂が区画整理事業によって普門寺へ移転したため、地藏は現在地へ移された。
10	山崎山八十八箇所石仏	●			4						●	赤穂南部に点在していた石仏を、明治33(1900)年に巡礼しやすいように山崎山に集積したものとされる。八十八箇所のうち一番は木像である。山崎山麓には一番札所があったという。八十番の板碑形石仏には明治35(1902)年の記念銘が残る。
11	地藏(雄鷹台山)	●			4						●	雄鷹台山斜面にある、像高112cmを測る丸彫りの立像。
12	不動明王(雄鷹台山)	●			4						●	雄鷹台山山上にある、像高66cmを測る半肉彫りの不動明王像。
13	黒谷不動	●			4						●	雄鷹台山黒谷にある、像高110cmの板碑。天保11(1840)年の造立。
14	地藏(天王道)	●			4						●	自然石の上に載る像高48cmの丸彫り坐像。頭部補修痕あり。
15	迎え地藏(東沖)	●			4						●	東沖の元三昧跡にある、像高108cmの丸彫り坐像で、宝暦6(1756)年の造立。
16	東惣門石標	●			2 4 27						●	城下町の東の押さえとして、浅野長直によって築かれた惣門で、枳形構造をもち惣門と番所が設置されていた。跡地周辺には石標が建てられている。
17	大蔵省境界石標	●			30						●	旧日本専売公社赤穂支局(現・赤穂市立民俗資料館)敷地の南東に残されている、境界石標。北の隣接地には時期の異なる専売公社の境界石標が2本残る。
18	赤穂町道路元標	●			27						●	高さ99cmで正面に「赤穂町道路元標」、背面に「兵庫縣」と記す。かつては花岳寺門前に建てられていたが、現在は赤穂市立民俗資料館の敷地内に移築されている。旧位置には「加里屋道路元標」の碑が平成2(1990)年に建てられた。
19	道標(上飯屋)	●			4 27						●	鷹の羽公園から60m西の四つ角の路傍に建つ。高さ92cmの凝灰岩製の道標。「左 □(大)坂道 義士もぞふあり」と刻まれている。
20	大石神社神饌所新築之碑	●			1						●	明治16(1883)年に仙桂和尚が大石神社創建願いを出し、明治33(1900)年に兵庫県知事から「大石神社創立の件開届」と許可書を受け、三之丸大石邸跡の一角に創建されたことを記念して、大正2(1913)年に建立された。
21	故浅野氏家老大石君遺愛桜樹碑	●			1						●	安政5(1858)年建立。大石大夫遺愛桜碑と一対になっている。
22	大石大夫遺愛桜碑	●			1						●	大正9(1920)年、浅野赤穂城主の筆頭家老内蔵助を称え、赤穂重賢齋である赤穂慶慶氏によって建立された。故浅野氏家老大石君遺愛桜樹碑と一対になっている。
23	義芳碑	●			1						●	明治45(1912)年、大石神社建築に際し本丸内の一石を神社の境内に移し建立。義芳の文字は幕末の儒者佐藤一斎の漢詩書「忠芬義芳」より転写。義芳門から参道の右側にあったが、義士討入り300年記念事業の一端で大石邸庭園の現在地に移転。
24	吉田忠左衛門遺愛桜碑	●			1						●	大正9(1920)年建立。明治45(1912)年に拜殿手前の注連柱右側に吉田忠左衛門遺愛の枝垂れ桜が移植されていたが枯死、この碑のみ残っている。
25	仙桂和尚表功碑	●			1						●	赤穂大石神社境内にある。大石神社創建の功労者である花岳寺二十一世の住職仙桂和尚の表功碑。碑文は鞍掛三郎の撰、書は黒田俊徳で昭和3(1928)年に建立された。
26	武士道歌碑	●			1						●	婦女新聞社長福島四郎の詠歌「播磨路のあさ野の末に武士の道しるべとててる大石」を法学博士泉二熊熊が自然石に揮毫彫刻。昭和16(1941)年に上城玉垣西番絵馬殿北側に建立されていたが、平成の新造営に当たり大石庭園に移転された。
27	退筆塚	●									●	昭和24(1949)年に赤穂神社境内より移設したもので、文政14(1831)年の建立の碑文銘がある。平成12(2000)年に七社合祭殿右の現在地に移された。
28	萬福寺本堂再建記念碑	●									●	万福寺境内にある。住職源誓願が昭和15(1940)年に建立。
29	燦矣開拓魂之碑	●									●	昭和23(1948)年より始まった千鳥ヶ浜開拓の開拓の労苦を伝えるため、昭和37(1962)年に建立された。
30	稲荷神社社務所建築碑	●			33						●	大正11(1922)年建立。
31	文久事件関係者の墓	●			1						●	文久事件(1862年)に関係した青木彦四郎・浜田豊吉・松本善次郎の墓である。青木は自宅で、浜田・松本は花岳寺でそれぞれ自害した。大蓮寺には西川升吉の墓がある。
32	武川先生頌徳碑	●			1						●	赤穂城本丸内にある。武川壽輔は会津に生まれる。陸軍少将退役後、旧制の兵庫県立赤穂中学校の初代校長を勤める。かつて赤穂藩に招聘された同郷の山鹿素行を慕い、校長就任を承諾したという。昭和14(1939)年に赤穂城跡本丸天守台北側に建立、平成元(1989)年移築。
33	良寛歌碑	●			4						●	赤穂城三之丸塩屋門付近にある。歌碑は良寛が諸国行脚の途中、赤穂天神の森に立ち寄り野宿したときに歌ったものといわれ、弱い人間の心、悲しみのため息が感じられ、一人の貧しい行脚僧も受け入れない人の世の冷たさへの嘆きが漏れている。昭和29(1954)年建立。
34	忠義塚	●			1						●	花岳寺境内にある。義士50回忌を前にして寛永3(1750)年に建立されたもので、府臣某とは奥藤利栄、松本善宣、柴原教長、奥藤利徳、田淵春元、柳田吉甫らのことを指したものとされる。撰文を請われた藤江熊陽(忠康)は、赤穂に生まれ義士の流れを汲む人として、その願いに応えたものである。
35	忠義櫻句碑	●			1						●	花岳寺境内にある。赤穂藩において義士追慕の句を募ったとき「忠に映き義に散る櫻の樹かな」の小林良貞の句が秀逸に当り、それらに広く人口に膾炙されていたのを、義士50回忌に伴って書かれた句碑として寛永5(1752)年に建立した。
36	双松碑	●									●	花岳寺境内にある。境内にあった2本の松を大石良雄手植えの松と伝える。文政10(1827)年建立。
37	講師秀存碑	●									●	万福寺境内にある。万福寺18世住職の秀存の顕彰碑、明治30(1897)年建立。
38	前賢松泉先生碑	●									●	妙慶寺境内にある。前賢松泉は元治元(1864)年坂越村に生まれる。塾村と号し、赤穂・坂越で教鞭をとり、塩屋小学校長などを30年務めた。また陶芸、花道など幅広く道を究めた。昭和2(1927)年建立。
39	広延齋神田精甫・旭光齋神田英甫碑	●									●	大蓮寺境内にある。廣延精甫は通称十郎、旭光齋神田英甫は通称啓太郎といひ、花道を極めた。石碑は明治38(1905)年建立された。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧(2)

※視点番号は252頁を参照。

No.	名称	も	場	と	地域	の歴史	文化	赤穂を代表する歴史文化						解説	
								1	2	3	4	5	6		
40	謝恩碑	●													大蓮寺境内にある。神吉鈴子は安政2(1855)年生まれ、21歳の時に断髪し、裁縫・挿花を究めて家塾を40年営んだ。大正6(1917)年に死去。昭和3(1926)年に石碑が建立された。
41	宮崎先生碑	●													龍安寺境内にある。宮崎清七は天保5(1834)年に生まれ、幼くして誦曲、歴史などを教えた。明治33(1900)年建立。
42	児玉口君記念碑	●													龍安寺境内にある。伊丹警察署分署の捜査の殉職碑。明治39(1906)年建立。
43	前川氏遠祖功德碑	●													龍安寺境内にある。前川氏の出自、龍安寺の縁起を記す。嘉永3(1850)年建立。
44	西浜塩田三ツ樋流一番跡石碑	●			4	30									三種町西側のグリーンベルト内にある石碑で、高さ153cm、幅30cmを測る。正面には「西浜塩田三ツ樋流一番跡石碑」「昭和四十(1965)年築田」、裏面には「昭和六十一(1986)年三月 赤穂市教育委員会建之」と刻まれている。
45	大石内蔵助良雄像(RR播州赤穂駅前)	●			1										JR播州赤穂駅前のロータリーに建つ像は、昭和58(1983)年に赤穂ライオンズクラブ認記20周年を記念して建立された。作者は二科会審査員の高橋忠雄氏。
46	大石内蔵助良雄像(赤穂市役所内)	●			1										市役所一階の市民ホールに建つ像は、昭和57(1982)年に市職員より市役所新庁舎竣工を記念して設置。制作は兵庫県彫刻家連盟会員の広嶋照道氏。
47	山鹿素行像	●			1	2	4								赤穂藩士の教育、赤穂城建築の縄張り等に寄与した儒学者、山鹿素行は嘉永6(1853)年、幕府の封建政治を非難し朱子学を攻撃したとして赤穂に流刑に処され、大石頼母助(大石良雄の大叔父)の奥座敷に住まいをもったという。銅像は大正10(1921)年に大石頼母助屋敷跡に建立されたが、戦時供出で失われて昭和33(1958)年に再建。平成10(1998)年には二之丸庭園整備に伴う発掘調査のため、現在地に移された。なお二之丸にあったとされる「山鹿素行舘居地」は、「兵庫県史跡名勝天然記念物保存費補助規定」に基づき史跡として、かつて認定されていた。
48	義士あんどん(からくり時計)	●			1										市制施行60周年を記念して設置された高さ4m程のからくり時計「義士あんどん」。午前9時〜午後8時の毎正時、からくり人形が忠臣蔵の名場面「松の廊下」「はやかご」「勝どき」などを再現する。
49	大石なごりの松(花岳寺)	●			1										大石内蔵助良雄は、母松樹院が亡くなった時に冥福を祈るため植えたといわれる2本の松は、樹齢310年の「大石なごりの松」として「兵庫県史跡名勝天然記念物保存費補助規定」にもつづく天然記念物の認定を受けていた。しかし昭和2(1927)年に枯死したため、現在は二代目の松が植樹された。一代目の松は、千手堂(休憩所)に切り株として記念保存されている。
50	かんかん石	●			2										赤穂城跡二之丸門跡付近にあり、周辺の石垣に使われていた石。石でたたくと「かんかん」と音がすることから呼称されている。
51	赤穂鉄道顕彰碑	●			27										赤穂鉄道播州赤穂駅跡の赤穂鉄道記念碑が、赤穂市民会館敷地内に建てられている。昭和43(1968)年12月建立。
52	赤穂城跡	◎			1	3	27	32	35						正保2(1645)年6月、浅野長直が池田輝興除封の後をうけて、常陸国笠間から転封し、慶安元(1648)年から寛文元(1661)年にかけて築城した。縄張りは当時の地形を利用してを得たものと認められる。大手門、水手門付近その他において近世初期に発達した軍学の影響と思われる手法が見られる近世城郭史上価値ある城跡である。国指定史跡。
53	旧赤穂城庭園 本丸庭園 二之丸庭園	◎			1	3	28	34							本丸庭園は、御殿南面の大池泉、中央坪庭の小池泉、本丸北西隅の池泉が設けられており、発掘調査後、検出した遺構を整備し公開している。二之丸庭園は、本丸門前に占める大石頼母助屋敷南部から、二之丸西丘切まで至る池泉からなる大規模な庭園であり、裏面の水はすべて旧赤穂上水道によって賄われていた。本庭園は本丸・二之丸一体となっており保存されている大名庭園であり、平成14(2002)年に「旧赤穂城庭園 本丸庭園 二之丸庭園」として国名勝指定を受けた。
54	本丸大池泉	◎			1	3	28	34							赤穂城跡本丸内、南側にある大規模な池泉で、発掘調査によってきわめて良好な状態で検出された。池には中島・入江・舟をすつらえ、護岸汀線は直線・曲線を巧みに組み合わせ、池の底には割石・砂利石を敷き、一部には瓦を幾何学的に敷き詰めるなど趣のある造形をもっている。
55	坪庭池泉	◎			1	3	28	34							赤穂城跡本丸内、御殿中央坪庭の小池泉は、流れの池泉と舟形の池泉という並列した二つの池泉から構成され、池泉の南側護岸は漆喰に玉石を配した敷き詰め状の特徴ある仕上げとなっている。なお舟形の池泉は赤穂の昔話「赤穂城の石舟」に出てくる「石舟」になぞらえることができる。(赤穂の昔話)
56	くつろぎ池泉	◎			1	3	28	34							赤穂城跡本丸内、古絵図では「くつろぎ」と記され竹林が描かれているにすぎなかったが、平成元(1989)年の発掘調査によって池泉跡が発見された。池泉跡からは多数の陶磁器類や木製品が出土したが、なかでも「浅野内匠頭」(大石内蔵助)など歴史上の人物名が記された木簡が目玉となる。
57	旧日本専売公社 赤穂支所 (赤穂市立民俗資料館)	◎			30										明治38(1905)年の塩専売法施行に伴い、明治41(1908)年に建設された塩務局庁舎。日本に唯一現存する塩務局庁舎で、現在は市立民俗資料館として、市内で収集された民俗資料を展示している。県指定。なお近隣には旧日本専売公社の新庁舎(現・赤穂市シルバー人材センター)、塩倉庫などが残されている。
58	花岳寺山門	◎			1	4									城下町の西惣門であったものを、明治6(1873)年に花岳寺二十一代仙理和尚が購入移築した。住は当時のものより約3寸短くなっていると思われる、建材は梅を主としている。主屋根は本瓦葺きで、棟木と出桁が一支半継ぎたしされている。本山門は高麗門形式をとり、西惣門の遺構であるため、素材無骨で武家門の風格を備えた城郭付属建築と言える。市指定。
59	大蓮寺山門	◎			1	2	4								一般的な門形式に該当しないもので、棟に1本の冠木を通しているが、中央棟と両脇棟の屋根を段違いにして中央を開き、両脇を片開きとし、三間一戸の形式をとる。市内の寺院にはほかに見られない特異な門であり、規模が雄大で18世紀の建築として貴重な建築遺構である。
60	大石良雄宅跡(長屋門)	◎			1	3	34								浅野家筆頭家老大石一家三代が57年にわたり居宅を構えた。屋根瓦には大石家の家紋であるツバが見られる。また元禄14(1701)年3月主君の刃傷事件を伝える早打ちが叩いた門ともされている。安政3(1856)年に大修理が行われ、大正12(1923)年に国史跡に指定された。
61	近藤源八宅跡長屋門	◎			1	3	34								赤穂城の設計を担当した近藤三郎左衛門正純の子、近藤源八正憲の屋敷跡に残る長屋門。父の跡を継いで甲州流軍学を修め、浅野家の軍師として千石番頭の大重職にあった。長屋門は三分の一が改変を受けたにもかかわらず保存されており、平成10(1998)年に市指定文化財となった。その後、現存建築物の解体修理が行われ、平成11(1999)年から一般公開されている。
62	本丸	●			1	3	28	34							本丸内の面積は4,580坪でこのうち約三分の二を御殿・庭園・天守台・その他の建物が占めていた昭和3(1928)年には兵庫県立赤穂中学校(現・兵庫県立赤穂高等学校)が内部に建築されたが、国指定を受けて昭和56(1981)年に移転。昭和58(1983)年より発掘調査が開始され、平成8(1996)年に本丸門が整備されるなど、平成13(2001)年の厩口門の整備によって一旦整備が完了し、公開されている。
63	天守台	●			1	3	34								赤穂城跡本丸内、本丸の天守台は独立して東南隅の最要部部にあり、東西8間、南北9間、高さ3丈1尺5寸の四方石垣で、打込接を主とし、隅角部は算木積みである。廢藩置県後は隅角上部が破壊されていたが、昭和初期に修復された。
64	本丸門	●			1	3	34								赤穂城跡本丸内、本丸門は寛文12間余に南北8間余の約100坪の虎口桁形を控えて、一の門と二の門を修む多門であった。発掘調査の結果や古写真等を資料として、平成8(1996)年に復元が完成した。
65	厩口門	●			1	3	34								赤穂城跡本丸内、浅野家時代には厩口門、森家時代には台所門と呼ばれていた。廢藩置県後に失われ、昭和42(1967)年には県立赤穂高校の通用門として改変された。発掘調査の成果を活かして平成13(2001)年に整備された。
66	刎橋門跡	●			1	3	34								赤穂城跡本丸内、本丸の南面、藩邸の裏手にあたる門で、非常門とも不浄門とも伝えられる。建坪5坪の小門で、ここから二之丸へ開閉式の刎橋が架けられていた。現在は本丸内に、門へ至る斜路が整備されている。
67	本丸御殿跡	●			1	3	34								赤穂城跡本丸内、本丸内の大部分は藩邸である御殿が占めていた。御殿は表・中奥・奥から構成され、表御殿は政務を行う公的な場、中奥は藩士の私的な場、奥は女中たちの部屋として使用された。この地にあった兵庫県立赤穂高等学校が移転した翌々年の昭和58(1983)年から発掘調査が開始され、昭和61(1986)年に御殿取りが整備された。
68	本丸東北隅櫓台	●			1	3	34								赤穂城跡本丸内、本丸にあった唯一の隅櫓で、東西4間2尺、南北3間4尺2寸の基礎部を持つ二重櫓であった。明治初期築形の本丸門の古写真にはかすかにこの櫓が写っており、往時の姿をうかがうことができる。現在は礎石も失われているが、櫓台に登る石段の一部が残存している。
69	本丸外堀	●			1	3	34								赤穂城跡本丸内、本丸を取り巻く外堀で、本丸門の土橋部分のみ途切れている。発掘調査によると掘底はほぼ平坦で深さは1.5m前後と比較的浅い。明治の廢藩置県後は田畑として利用されたが、昭和28(1953)年に降順次復元され、平成10(1998)年に全周の復元が完了した。
70	二之丸	●			1	3	34								本丸をほぼ円形に包む二之丸で、面積は1万7,259坪、堀によって本丸と隔てられた。石垣は本丸より小さいが、●・門などを除いて、681間余、高さは3間4尺と記録されている。
71	二之丸門跡	●			1	3	34								赤穂城跡二之丸内、山鹿素行が自ら設計の変更をした二之丸門は、墨線から引き込まれてやや南寄りの西方に開かれた。門は櫓門で口幅3間1歩、高さ2間、建坪9坪のもので、門前には簡単な馬出し(石畳)が設けられていた。明治25(1892)年の千種川大水害の復旧のため二之丸城壁が撤去されていたが、発掘調査では桁形石垣の根石が検出されてその構造が判明したことを受け、平成25(2013)年に一部の石垣が復元整備された。
72	西中門跡	●			1	3	34								赤穂城跡二之丸内、三之丸干潟門の北東に西向きに設けられた。西の門ともいったが、内部が二之丸庭園であり平時は番人もなく閉ざっていた。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧(3)

※視点番号は252頁を参照。

No.	名称	も	場	と	地域	の歴史	文化	の視点	赤穂を代表する歴史文化						解説	
									1	2	3	4	5	6		
73	二之丸北隅櫓台	●			1	3	34		●							赤穂城跡二之丸内。二之丸門の北西部に位置し、往時は東西3間半、南北4間半の基礎部を持つ一重櫓が存在した。平成16(2004)年の発掘調査では埋没石垣が見つかり、赤穂城の櫓台の中でも古い時期に構築されたことが判明した。平成18(2006)年に解体修理が実施された。
74	二之丸東北隅櫓台	●			1	3	34		●							赤穂城跡二之丸内。二之丸の東北隅、清水門の南に位置する二重櫓で、基礎部は東西3間半、南北4間1尺の規模を持っていた。櫓台の石垣は明治25(1892)年の大洪水の災害復旧用資材として持ち去られて大半は失われたが、平成8(1996)年に復元整備された。
75	西仕切門	●			1	3	34		●	●						赤穂城跡二之丸内。西仕切は二之丸を南北に二分する城壁の一つで、低石垣の上に土塼がめぐらされていたことが古絵図や発掘調査から明らかになっており、そこに小門が東に面して設けられていた。古絵図では「透し門」ともあり、発掘調査で検出された遺構等の成果をもとに平成22(2010)年に復元整備された。
76	東仕切門跡	●			1	3	34		●	●						赤穂城跡二之丸内。天守台東側の堀に接して、二之丸仕切の石垣があり、これに小門が西に面して設けられていた。古絵図によれば、東仕切の北側には作事小屋が、南側には馬場があった。平成25(2013)年の発掘調査で、仕切土塼石垣とそれに接続する二之丸城壁の腰石垣が発見され、位置がほぼ確定された。
77	水手門跡	●			1	3	34		●	●						赤穂城跡二之丸内。二之丸の南端に位置し、海もしくは干潟に面した門で、間口1丈、高さ2間余り、建坪4坪の規模を持っていた。門の周囲は船の出入りのため城壁を大きく内側に引き込んだ水塼の縄張りとなり、その城壁は緩やかな曲線を描いて西方の南沖櫓台へとつながっていることが特徴である。門前は雁木と突堤が築かれており、雁木と突堤については平成10(1998)年に発掘調査及び復元整備が行われた。
78	大石頼母助屋敷跡	●			1	3	34		●	●						赤穂城二之丸。二之丸門を入ると右手には大石頼母助屋敷があった。大石頼母助良重は大石内蔵助良雄の大叔父に当たる人物で、特に藩主直に重用され赤穂においては二之丸に屋敷を賜った。山鹿素行が赤穂に配流された際、素行は二之丸の大石頼母助の屋敷の一角で8年余りの謫居生活を過ごした。頼母助屋敷は発掘調査によって遺構が明らかとなり、平成21(2009)年にはその成果を活かして屋敷門が整備された。
79	二之丸庭園表門	●			1	3	34		●	●						赤穂城二之丸。二之丸庭園の南東隅角にあたり、発掘調査では後世の削平によって遺構は失われていたが、古絵図の資料から門の存在が判明し、平成20(2008)年に冠木門が整備された。
80	元禄桜苑(花見広場)	●			1				●							赤穂城跡二之丸内。二之丸にある花見広場。二之丸南西部にあり、発掘調査を行ったところ遊水池遺構が発見された。現在は池の復元がなされ、周囲には元禄期のサクラの品種など18種200本余りが植えられて市民の憩いの場となっている。
81	遊水池跡	●			1	3	34		●							赤穂城跡二之丸後部にあった池跡。発掘調査によって発見され、現在は花見広場の中に復元整備されている。
82	三之丸	●			1	3	34		●	●						二之丸の北・西部を囲む郭が三之丸で、面積は約2万2605坪と算定される。石垣は全長573間5尺、高さは3間と記されているが、塩屋門から干潟門にいたる部分は高さ約1間半と低い石垣が築かれている。
83	三之丸大手門枋形	●			1	3	34		●	●						赤穂城跡三之丸内。浅野長直が赤穂城を築城した際に城域を拡張した部分が、赤穂城の玄関口ともいえる三之丸大手門である。明治30(1897)年に石垣が改変されたが、平成13(2001)年には発掘調査の成果を活かし、再び往時の姿に整備された。
84	三之丸大手隅櫓	●			1	3	34		●	●						赤穂城跡三之丸内。大手門の北にある二重櫓で、東西4間半、南北3間半の基礎部を持つ二重櫓である。大手門を監視する到着櫓としての性格を持ち大手門防備の要となる櫓である。明治初期に取り壊されたが、昭和30(1955)年に大手門や土塼とともに再建された。
85	塩屋門跡	●			1	3	34		●	●						赤穂城跡三之丸内。枋形の門である。口幅2間2歩、建坪5坪、門を入ると正面に番所、その裏には長さ13間2尺、高さ2間半、幅2間半の石塼があり、内枋形をしていた。この枋形内に太鼓櫓が、藩士に合図をした。門の向きは南寄り、西向きで、足軽・下番各2人、三道具一組が配置された。
86	清水門跡	●			1	3	34		●	●						赤穂城跡三之丸内。三之丸東に口幅2間2歩、建坪4坪の清水門があり、板橋を渡ると米蔵、御業煙場、川口番所に出られるようになっていた。門番は一人で平常は閉門していた。発掘調査の成果を活かし、平成3(1991)年に橋石垣の復元整備が行われた。
87	干潟門跡	●			1	3	34		●	●						赤穂城跡三之丸内。潟口門とも呼ばれた。二之丸水手門と同様、海に面していた。口幅1間2歩、建坪5坪、平常閉門、番人なしであった。
88	武家屋敷公園	●			1	4			●							赤穂城跡三之丸内。清水門の西側に位置し、浅野時代には坂田式右衛門の屋敷があった。昭和58(1983)年に門と瓦葺土塼を復元し、内部は部屋の間取り表現を行ったほか、井戸屋形や凹阿などを設けている。また屋敷地の植栽には当時の侍屋敷の生活をしのばせる野菜や菓草類なども植えられている。
89	樋門跡	●			1	3	34		●							赤穂城跡三之丸内。赤穂城跡二之丸外堀の水量調節の樋門で、三之丸城壁の石垣面に開口している。水は堀から石組み溝によって導かれ、城壁の下を通りこの樋門から城外へ排水された。
90	三之丸外堀護岸復元	●			1	3	34		●							赤穂城跡三之丸内。三之丸外堀は、清水門から塩屋門西までの間に巡っていた。廢城後に田畑となっていたものを順次復元したが、塩屋門周辺は区画整理により、道路や宅地となっている。その一部については発掘調査によって護岸石垣が検出されており、現在はモニュメント公園が整備され、往時の堀幅を表示している。埋没した堀部分の一部は平成15(2003)年8月27日に史跡の追加指定が行われた。
91	船入跡(赤穂城)	●			1	3	34		●							赤穂城の東に隣接する米蔵の南側にあり、熊見川に開口していた。昭和59(1984)年～61(1986)年に一部が発掘調査された。船入の内部は石垣護岸となり、棧橋状の突堤が付設されていた。
92	赤穂市役所遺跡	●			34				●							昭和31(1956)年市庁舎建設のための基礎工事中、数片の土器が発見された。赤穂デルタが形成され、瓦器を使用するような階層の人が居住したと考えられる。
93	千鳥ヶ浜土器採集地	●			34				●							千種川河口の西側の高い堤防の外側に広い砂浜がある。これが千鳥ヶ浜で、この砂浜は千種川の流れによって運ばれた土砂の沖積地である。河口の砂浜で採集された土器片は弥生時代のものであった。
94	加里屋古城跡	●			2	29			●							15世紀頃、熊見川河口は急速に陸地化が進んでいくなかで、山麓部から人々が移住してくるとともに、河口部の中村が遷町として栄え始めた。そこで岡登前守は中村の西、熊見川の対岸に加里屋古城を築き、新たな砦とした。『藩州赤穂郡志』によると加里屋古城は城下町の一目丁と寺町の間南北66間、東は大川(熊見川)、西は横町に限った範囲にあったといふ。16世紀には周辺で寺の建立が始まり、城下町も充実しはじめた。江戸時代になると城はさらに南に移動し、加里屋古城跡は城下町の町家へと変わっていった。
95	橋上城跡	●			2	4			●							池田河内守長政時代に垂水半左衛門勝重によって城ヶ洲に構築された。古絵図には一重の石垣に囲まれた城郭が描かれており、現在の本丸跡にあたりと推定されているが、池田時代にはその後も様々な城郭増築が行われたことがわかっている。
96	土取場跡	●			2				●							赤穂城築城時の土取り場跡。『年々御侍屋敷其外色々御用定引覧』によると、「慶安四(1651)年御城御普請ノ時土取場ニ成、所は伊藤五右衛門棟ノ南堤ノ外畠」とされている。
97	西惣門跡	●			1	2	4	27	●							現在のJR赤穂線の高架下周辺に該当する。備前街道より赤穂城下へ入る際の西の押さえの門であり、現在の赤穂城を築いた浅野長直が城下町を拡張した際、東西に惣門を築き番所を配して守りとした。この門の一部は花岳寺の山門として移築されている。
98	御成道	●			4	27			●							花岳寺門前の道の通称。古くは赤穂城の大手から花岳寺までを浅野菩提寺の参詣道として御成道といひ、とくに重要視されたといふ。
99	鎌型街路	●			2	4			●							城下町内の道を、鎌形に曲げたり袋小路を設けるなどすることで見通しをなくし、城への到達時間を延長させたもの。現在も各所に見られる。
100	武者隠し	●			2	4			●							城下町内の道幅を突如広めることによって死角を作り出し、突如狭めることによって敵の軍勢の勢いを軽減させるなど、城下町防備の工夫が現在も残されている。
101	侍屋敷(上仮屋)	●			2	4	36		●							侍屋敷は城の北西に整備された。浅野家が赤穂に入封したときも、石高の増加に伴って城下町を拡大整備したのみである。二之丸、三之丸には重臣邸が置かれ、侍屋敷の大部分を占めたのは塩屋門外の上仮屋の一帯であった。
102	町家(加里屋)	●			2	4	30		●							町家は城の北方に整備されていた。町家は17町に分けられていた。
103	外村源左衛門屋敷跡	●			1				●							浅野家臣で禄高400石番頭。刃傷事件後、藩札引き替えの資金借用に奔走したが、当初から開城論に立ち、当初から盟約には加わらず。
104	糟谷勘左衛門屋敷跡	●			1				●							浅野家臣。250石の用人。浅野内匠頭長矩の遺骸を引き取り、高輪泉岳寺まで見送った6人の中の一人。討ち入りには参加せず。
105	佐々木平作屋敷跡	●			1				●							浅野家臣で、15石3人扶持。屋敷地は東面して間口13間半程、奥行き18間程であったと伝えられる。討ち入りには加わらず。
106	大木弥右衛門屋敷跡	●			1				●							浅野家臣で500石の中小姓頭。屋敷地は間口30間、奥行き30間以上を測る広大なものであった。屋敷地横手の三之丸城壁には二之丸外堀の水量調節用の樋門がある。
107	小松又右衛門屋敷跡	●			1				●							浅野家臣で150石の膳番。屋敷地は西面して間口13間程、奥行き20間程であったと伝えられる。屋敷地裏は二之丸外堀となっており、堀の対岸には一重櫓があった。
108	間瀬久太夫宅跡	●			1				●							義士宅址。間瀬久太夫正明は寛永18(1641)年生まれ。役職は目付(大目付)で知行高は200石・役料10石であった。間瀬孫九郎の父、小野寺十内の従弟にあたる。享年63歳。
109	磯貝十郎左衛門宅跡	●			1				●							義士宅址。磯貝十郎左衛門正久は延宝7(1679)年に江戸で生まれた。役職は用人(近習・物頭並側用人)で、知行高は150石であった。享年25歳。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧(4)

※視点番号は252頁を参照。

No.	名称	もの	場所	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化						解説
					1	2	3	4	5	6	
110	大石瀬左衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。大石瀬左衛門信清は延宝5(1677)年に赤穂で生まれた。役職は馬廻で知行高は150石であった。享年27歳。
111	片岡源五右衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。片岡源五右衛門高房は寛文7(1667)年に名古屋で生まれた。役職は用人(内証用人)で知行高は350石であった。享年37歳。
112	菅谷半之丞宅跡	●		1				●			義士宅址。菅谷半之丞政利は万治3(1660)年に赤穂で生まれた。役職は馬廻・代官で知行高は100石であった。享年44歳。
113	近松勘六宅跡	●		1				●			義士宅址。近松勘六行成は寛文10(1670)年生まれ。役職は馬廻(給人)で知行高は250石であった。奥田貞右衛門の兄。享年34歳。
114	早水藤左衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。早水藤左衛門満登は寛文4(1664)年に備前国西大寺で生まれた。役職は馬廻(給人)で知行高は150石であった。享年40歳。
115	大高源五宅跡	●		1				●			義士宅址。大高源五忠雄は寛文12(1672)年に赤穂で生まれた。役職は中小姓近習・膳番で知行高は20石5人扶持であった。享年40歳。
116	貝賀弥左衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。貝賀弥左衛門友信は慶安3(1650)年生まれ。役職は中小姓近習・蔵奉行で知行高は10両・役料2石3人扶持であった。吉田忠左衛門の弟。吉田沢右衛門の叔父。享年54歳。
117	不破数右衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。不破和右衛門正種は寛文10(1670)年丹波国古市で生まれた。役職は浪人(元馬廻・元浜辺普請奉行)で知行高は元100石であった。間瀬久太夫の甥。享年48歳。
118	勝田新左衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。勝田新左衛門武堯は延宝8(1680)年赤穂で生まれた。役職は中小姓近習・礼座横目で知行高は15石3人扶持であった。享年24歳。
119	中村勘助宅跡	●		1				●			義士宅址。中村勘助正辰は明暦2(1656)年に越後国村上で生まれた。役職は馬廻・祐筆頭(給人ほか)で知行高は100石であった。間瀬久太夫の甥。享年48歳。
120	岡嶋八十右衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。岡嶋八十右衛門常樹は寛文6(1666)年生まれ。役職は中小姓近習・礼座勘定方で知行高は20石5人扶持。原惣右衛門の弟、下貝賀弥左衛門の甥。
121	原惣右衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。原惣右衛門元辰は慶安元(1648)年生まれ。役職は足軽頭(鉄砲頭・頭)で知行高は300石。岡嶋八十右衛門の兄。享年56歳。
122	間喜兵衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。間喜兵衛光延義士宅址。は寛文12(1635)年に近江国で生まれた。役職は馬廻・勝手方吟味役で知行高は100石であった。間重治郎・新六の父。享年69歳。
123	矢頭右衛門七宅跡	●		1				●			義士宅址。矢頭右衛門七兼は貞享3(1686)年に赤穂で生まれた。矢頭長助の子。享年18歳。
124	木村岡右衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。木村岡右衛門貞行は万治元(1658)年に赤穂で生まれた。役職は馬廻(絵図役)で知行高は150石であった。享年46歳。
125	岡野金右衛門宅跡	●		1				●			義士宅址。岡野金右衛門包秀は延宝8(1680)年に赤穂で生まれた。小野寺十内の甥、大高源五の従弟。享年24歳。
126	千馬三郎兵衛宅跡	●		1				●			義士宅址。千馬三郎兵衛光忠は承応2(1653)年生まれ。役職は馬廻で知行高は100石。享年51歳。
127	潮田又之丞宅跡	●		1				●			義士宅址。潮田又之丞高教は寛文9(1669)年に江戸で生まれた。役職は馬廻・国絵図役人で知行高は200石。享年35歳。
128	赤松滄州宅跡	●		4				●			赤松滄州・蘭室父子は、博文館をはじめとする赤穂藩の文教の基礎を築いただけでなく、近世後期における京都との文化交流の役割も果たした。
129	大島黄谷窯跡	●		4				●			大嶋黄谷は名を九郎次といひ、辨物・生花等に秀で、特に陶芸では黄谷と号して雲火焼と呼ばれる陶器を創り出した。この場所は熊見川の新生土にあたり、黄谷に陶芸を教えた作根弁次郎が築いたもので、黄谷も使用したという。
130	博文館跡	●		4				●			藩医、医儒であった赤松滄州と、その子蘭室の尽力により、家臣の子弟教育のため安永6(1777)年に完成した藩校である。落成に先立ち「博文館規程」が制定され、言行を慎み、諸書を博覧し、詩文に通じた人材の養成を目的とした。明治維新後は、明治5(1872)年の学制発布を経て、翌年に博文小学校として引き継がれたが、明治10(1877)年には学校統合とともに中村に移転した。現在は鶴の丸公園となっており、平成29(2017)年の発掘調査で建物の位置が確定した。
131	木南家住宅	●		4				●			旧備前街道に面して建つ、取り込み格子、出桁造の厨子2階の町家。明治34(1901)年築、平成10(1998)年に赤穂市市街地景観重要建築物に指定。
132	山崎家住宅	●		4				●			旧備前街道に面する間口中央に庭を挟んだ母屋と塩蔵がある。幕末～明治初期築、平成10(1998)年に赤穂市市街地景観重要建築物に指定。
133	新田家住宅	●		4				●			御成道に面した、黒漆喰塗りの重厚な建物。昭和7(1932)年築、平成6(1994)年に赤穂市市街地景観重要建築物に指定。
134	谷家住宅	●		4				●			御成道に面する2階の虫籠窓の意匠が見られる本瓦葺きの建物。昭和6(1931)年築、平成6(1994)年に赤穂市市街地重要建築物に指定。
135	濱尾家住宅	●		4				●			赤穂城下町の特徴で塀で囲まれた人母屋造の厨子二階武家風住宅。明治中期築と推定。平成10(1998)年に赤穂市市街地景観重要建築物に指定。
136	天神宮跡(梅通寺跡)	●		4				●			天保3(1647)年、浅野長直が笠間城内にあった鎮守を塩屋門西に移し「天神宮」として建立したものである。元文元(1736)年～明和6(1769)年頃には、森忠洪によって空き地となっていた大連寺南に移された。明治12(1879)年の寺社明細帳によれば、信徒は7,108人を数えたが、明治42(1909)年、この地に移転してきた赤穂神社に合祀された。天神堀に住む「ガタウ」という河童が登場する昔話がある。(赤穂の昔話)
137	赤穂神社跡(天神宮・天満神社跡)	●		4				●			明和3(1767)年、森忠洪が赤穂城二之丸後郭に建立した森家三靈祠を前身とするもので、明治10年代に赤穂神社と改称した後、塩屋門西(博文館跡)に遷された。明治42(1909)年には加里屋町の天満神社(天神宮)跡地に改築移転、昭和24(1949)年には大石神社に合祀されたが、建物は改修されながらも赤穂カトリック教会として長く使用された。平成25(2013)年、幼稚園舎建替に伴い解体された。
138	赤穂大石神社	●		1 33				●			明治天皇の官旨を契機として明治33(1900)年に神社創立が公許せられ、大正元(1912)年11月、四十七義士命を祀る神社が大石良雄宅跡を含む敷地に建立された。祭神は大石内蔵助良雄以下四十七義士命と寛野三平命を主神とし、浅野長直・長女・長姫の三代の城主、その後の藩主森家の先祖で本能寺の変に散った森蘭丸ら七人の武将を合祀する。昭和24(1949)年に赤穂神社を合祀し、赤穂大石神社となった。境内には義士史料館、義士宝物館、義士木像奉安殿、大石邸長屋門・庭園などがある。
139	稲荷神社(中広)	●		33				●			祭神は倉稲魂命。本殿・拝殿・社務所のほか、淡島社が合祀されている。毎年10月第3日曜日には中広地区の秋祭りや獅子舞の奉納が行われている。
140	龍安寺・荒神社	●		4				●			寛永3(1626)年に真言宗として天王山の西麓に開山し、元禄14(1701)年に中興されて禪宗に改められ、現在に至る。山号は荒神山。龍安寺にある天王神社は上郡町の長嶺神社から遷してきたものと伝えられる詳細は不明。このほか三宝大荒神社と稲荷社が祀られている。境内には、延享5(1748)年造立の石をもつ像高75cmの地藏菩薩像(像と台石は石材が異なる)、像高64cmを測る丸彫りの石造地藏菩薩像がある。
141	万福寺	●		1 2 4 29				●			真宗大谷派の寺院で、播磨六坊の一つ、もと英賀(姫路市)に建立されていたが、那波大島(相生市)を経て天正年間(1573～1592年)に加里屋に移った。山号は大嶋山。
142	玉龍院	●		4				●			かつては玉龍庵、因首座といった。北側には慶長2(1597)年に移築再建されたという大高山長安寺(大業院)があったが、昭和32(1957)年に普門寺と相合して尾崎に移された。
143	妙慶寺	●		4				●			赤穂城を設計した近藤正純が建立したもので、赤穂城築城の余材をもって築かれたと伝わる。山号は大谷山。近藤正純の墓は、のちに花岳寺に移された。すぐ南に隣接して報恩寺もあった。
144	随鷗寺	●		1 2 4				●			元和2(1616)年に開創された臨済宗寺院で山号は江西山。開山の雲甫は不生禪を確立した盤理の師。かつて寺の裏は熊見川に面し、浅野時代には遠林寺とともに水軍の屯所としての役割を担っていた。境内の墓地には義士の肉親や近藤源八の墓があるほか、弘化5(1848)年造立、総高134cm、像高54cmを測る「羽鱗塔」地藏菩薩像のほか、嘉永元(1848)年造立、像高48cmの丸彫り坐像がある。後者は「延命地藏」「出世地藏」と呼ばれ、かつては上飯屋南にあったが現在整理事業によって移転、所在不明のち備前市で発見、平成18(2006)年に現地に安置された。
145	高光寺	●		1 2 4				●			大津村にあった日蓮宗寺院妙典寺が、寛永17(1640)年に備前街道に対する構えとして現地に移設。明暦3(1657)年に浅野長直から本願寺を受け、寛文2(1662)年には長直夫人の菩提寺となり、延宝2(1674)年にその法名から高光寺となる。寺には原惣右衛門が奉納した直筆の法華経8巻、大石内蔵助良雄画の大黒天画像、浅野家寄進の三十番神画像、鬼子母神十羅刹女画像のほか、義士の位牌などが残されている。山号は法羅山。
146	常清寺	●		1 4				●			慶安年間(1648-1655)に開創された真言宗の寺院で、もとは東性寺といったが、浅野長直三回忌の延宝3(1675)年に長直の法号をとって寺号とした。城下町の東北隅に位置し、東惣門の押さえての役割を担っていたという。寺には、浅野家からの寺領寄進状が残されている。山号は春日山。境内には10体の地藏菩薩像が安置されている。
147	浄念寺	●		4				●			真宗本願寺派の寺院で、明応4(1495)年に釈浄が開基した。かつて万福寺前であったが、元禄15(1702)年に現在の場所に移ったという。山号は等力山。
148	福泉寺	●		1 4				●			寛文5(1665)年に建立された法華宗寺院。境内には茅野和助の子猪之助の墓があるほか、大石頼助良重の書簡が伝わる。山号は長遠山。幕末の文久事件により藩政から退けられた村上真輔の次男河原路之助が藩領外へ立ち退く途中、襲撃の企てがあることを知り福泉寺で自害しており、境内にその墓がある。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧 (5)

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名称	も 場 所	地域 歴史 文化の視点	赤穂を代表する歴史文化						解 説
				1	2	3	4	5	6	
149	花岳寺(義土墓所)	●	1 2 4	●	●	●				正保2(1645)年に、浅野長直が父華藏院殿と母台雲院殿の菩提寺として建立し、その法名から雲山華藏寺と称した。曹洞宗永平寺の末寺である。以後、歴代藩主となる永井家、森家の菩提寺でもある。境内には浅野・森家墓、赤穂藩士47人の墓、義土宝物館、義土木像堂、大高源五の句碑、近藤正純の墓等があり、赤穂藩や義土関連資料が多く保存されている。ほか石仏として、享保19(1734)年、寛政2(1790)年、文化11(1814)年造立の地藏菩薩像などがある。なお池田時代、このあたりは鉄砲屋敷であり、周辺の調査で砲台関連遺物が出土している。
150	大蓮寺	●	1 2 4 29 35	●	●	●				浄土宗の寺院で、もとは北方の山麓にあったと伝えられ、城下町の形成とともに加里屋に移された。天文元(1532)年には、開山した寮道が没していることから、加里屋最古の寺院と言える。境内には帰依をうけた浅野長友夫人である戒珠院殿の墓があるほか、大石内蔵助良雄の寄進と伝えられる稲荷神社、石燈籠がある。また大川安碩、赤松蘭堂、神吉東郭といった幕末期の文人の墓が残されている。石仏としては安政3(1856)年造立の六地藏が安置されているほか、像高177cmを測る笠付板碑形の半円彫り立像がある。山門は市指定有形文化財。山号は照満山。
151	永應寺	●	1 2 4 29 32	●	●	●				延徳2(1490)年に開創された浄土真宗本願寺派の寺院。中村にあり「稲磨六坊」のひとつで、山号は朝日山。寺には大石内蔵助良雄から寄進された喚鐘とその際の書状が残されている。墓地には、享保12(1727)年に『播州赤穂郡志』を著した藤江忠廉の墓がある。
152	普門寺跡	●	4	●	●					天台宗園城寺派の寺院跡地。寺縁起によると古来は雄鷹山山にあり、慈覚大師の創建といわれているが、慶長2(1597)年、普門寺は赤穂東組(橋本町)、長安寺は赤穂西組(新町)に再建された。昭和32(1957)年、加里屋の区画整理事業により尾崎に移築され、両寺が相合して明王山普門寺と改称された。本尊は木造千手観音坐像で、国指定重要有形文化財に指定されている。
153	玄興寺跡	●	2	●	●					池田家の赤穂入封とともに、池田家の菩提寺として建立された臨濟宗妙心寺派の寺院。浅野家入封後は遠林寺と改められ、浅野家の祈願所となった。水軍の屯所として、赤穂城の出丸としての役割を果たしたという。
154	遠林寺跡	●	1 4	●	●	●				池田時代の臨濟宗玄興寺を浅野時代に真言宗遠林寺と改め、浅野家の祈願所、赤穂藩水軍の屯所とした。山号は冥應山。赤穂浅野家断絶後は大石内蔵助が開城の残務処理を行ったこともある。明治14(1881)年に廃寺となり、本堂は御崎の廣度寺に移築された。
155	長安寺跡	●		●	●	●				浅野時代の城下町の整備に伴って、高光寺とともに備前街道の西の出丸の意味をもって新町に建立された。「大衆院」とも呼ばれた。薬師如来堂があった。昭和32(1957)年に普門寺と相合した。
156	行宝院観音堂	●	4	●	●					新赤穂大橋の西詰めにあり、道路形状からかつての中村の南端にあたる場所に位置する。観音堂横には像高154cmを測る天保4(1833)年造立の丸彫り半伽藍(迎え地藏)を中心として、計23体分の地藏菩薩像が安置されている。
157	山崎山東水余し樋	●	3 28	●						戸島橋から200mほど上流にあり、導水路を流れる水の量を調節し、余った水を並んで走る愚水路に放流して水量を調節した。現在では近代的な施設に改修されているが、加里屋川の水源地の一部として、下流の水田を潤している。
158	戸島用水	●	2 3 4 28	●						正保2(1645)年、赤穂に入封した浅野長直は、城や城下町の整備とともに新田の開発を積極的に行った。慶安2(1649)年には「戸島井灌」を掘削し、翌年には戸島新田村を成立させた。この用水は184町9反5畝(約185ha)の灌漑用水として、また新田居村地区の生活用水としても利用され、現在は農業用水として役目を果たしている。大正2(1913)年からは鶴岡地区にも送水している。
159	戸島橋	●	3 4 28	●	●					導水路から塩屋、戸島新田への農業用水(戸島用水)の分岐点であるとともに、導水路を南下してきた水を浄化する役割も果たしていた。ここでは樋堰によって流れる土砂を沈殿させ、その上澄みの水を城下北端に設けられた百々呂屋裏大橋へ送っていた。現在では、ここまわって近代的な施設に変わってしまったが、付近には旧赤穂上水道案内板と、桁の石を転用した水憲の碑が建てられている。ここから分岐して塩屋、戸島新田の田畑を潤した戸島用水は浅野長直が築いたものであり、改修されてはいるが現在もなお使用されている。
160	農業用水との分岐	●	3 4 28	●						加里屋地区への農業用水路は、現在は赤穂小学校に隣接する「いこのハーモニー公園」の北側を西方向に通されている。この途中に仕切り板を差し込む穴があり、ここに仕切り板を差し込むことで水量が増し、余水が在時の上水導水路へと導かれ、城下町の旧上水道モニュメントへと通水されている。
161	余水排水溝	●	3 28	●						百々呂屋裏大橋のすぐ手前で、余水は東方に流れ、熊見川へ排水された。この排水溝は現在も残されており、現在の加里屋川護岸からの状況を見ることが出来る。周辺の護岸は幾度かの改修痕跡が認められる。
162	旧赤穂上水道モニュメント(駅前通り)	●	3 4 28	●	●					発掘調査や通水調査、文献調査などの総合調査によってその詳細が明らかとなった旧赤穂上水道のシステムと歴史的意義を記念し、その保存と活用を目的として昭和57(1982)年に設置された。赤穂小学校前からの余水が通水される水を検知し、上水道管から噴水のように水が噴き出すようになっている。
163	旧上水道ルート(旧上水道保存区域)	●	3 28	●	●					昭和55(1980)年の旧上水道調査の成果に基づいて設定された旧上水道の保存区間に該当する花岳寺裏の路地には、旧上水道の配水路ルート上にレンガが埋め込まれ、そのルートが視認できるようになっている。また保存区間では、現在も道路下に旧上水道管が横たわっており、「旧上水道」と記載されたマンホールは、現在も地下に残された遺構を守っている。
164	町家汲出橋水琴窟モニュメント	●	3 4 28	●	●					侍屋敷や町家への給水には、道路の下を通る配水管から引き込まれた給水管によって水が送られ、屋敷内の汲出橋からは長柄の桶やつるべを用いて汲み上げた。現在ではこうした汲出橋も多くが失われてしまったが、水琴窟モニュメントが整備されたこの小公園では、その裏側に当時の汲出橋がそのまま保存されている。内部を覗くと、土管が接続されているのを見ることが出来る。
165	旧赤穂上水道モニュメント(大手前公園)	●	3 4 28	●	●					赤穂小学校前の用水分岐を経て、赤穂藩上水道モニュメントの噴水を通して水は、赤穂城跡三之丸大手門前の大手前公園内に入り、池を潤す。ここでモニュメントに使用されている上水道管(陶管)は、実際の配水路に使われていたものを移築したものである。
166	配水路間橋	●	3 4 28	●	●					JR播州赤穂駅から赤穂城跡までの通称「お城通り」では、平成14(2002)年度に道路舗装工事が実施され、道路上の旧上水道配水路の間橋は上部が破壊されるとともに、内部も埋められて見えなくなってしまう。ただし江戸時代のメンストリートが現道とずれていたために「通り町」筋の配水路間橋を1基残すことができた。ここではグレーチングの隙間からではあるが、瓶桁に豊島石の井戸枠が組み合わされた間橋の四方に配水管が接続されている様子を実際に見ることが出来る。
167	大手門橋下の水道管	●	3 28	●						赤穂城三之丸大手門にある太鼓橋の下には、近代に改修された上水道管を見ることが出来る。
168	百々呂屋裏大橋跡	●	3 4 28	●	●					城下町の北端にあたり、ここで上水道の導水路は開渠から暗渠となった。周辺には水を浄水するために、2間四方の石組桁が設けられていた。発掘調査によって位置が確定し、路面表示が行われている。
169	赤穂城三之丸庭園の給水施設	●	2 3 28	●						赤穂城三之丸大手門枋形内を通じた上水道は、城内の侍屋敷を潤しながら二之丸門を通過した後、3方向に分岐する。南方は本丸内に入るものであり、東方は二之丸東仕切り切辺まで配水したようである。一方、西側には浅野家の重臣、大石頼母助良重の屋敷があり、その背後には広大な二之丸庭園が広がっていた。これら頼母助屋敷と二之丸庭園では、いずれも発掘調査が行われ、すべての水が旧上水道によって賄われていたことが明らかになった。
170	本丸御殿の給水施設	●	2 3 28	●						元禄14(1701)年の『城中井戸、水道につき藩回答』によれば、城内の井戸は掘削しても用水にできず捨て置かれたものという。そのため城下の水道はすべて上水道によって賄われた。絵図や発掘調査の成果により、台所や庭園への給水施設が明らかとなっている。
171	西浜塩田跡	●	2 30	●	●					江戸時代から近代にかけての西浜塩田区域。主として森時代に開発された。
172	旧日本専売公社赤穂支局新庁舎	●	30	●						昭和44(1969)年に専売公社赤穂支局として新築された建物。現在は公益社団法人赤穂市シルバー人材センターの事務所となっている。
173	塩倉庫跡	●	30	●						旧日本専売公社赤穂支局(現・市立民俗資料館)に隣接して塩倉庫跡が今も残されているほか、新川にかかる橋には、荷揚げの上家から塩倉庫へ塩を運ぶためにかつて使用されていた運搬車両用のレールが残されている。
174	赤穂鉄道播州赤穂駅跡	●	4 27	●						大正10(1921)年に播州赤穂一有年間の12.7kmを結ぶ軽便鉄道として開通し、昭和26(1951)年の国鉄赤穂線が開通するまで活躍した。播州赤穂駅は、現在の株式会社ウエスト神姫赤穂営業所周辺にあった。
175	JR播州赤穂駅	●	1 4 27	●						昭和26(1951)年12月12日に日本国有鉄道の駅として開業した。
176	旧備前街道	●	2 3 4 27 29	●						三石から西有年、湯の内、大津、戸島新田、塩屋、加里屋へのルート。城下周辺では現在も道筋が残されており、緩やかにカーブするために見通しが悪く、また武者隠し等の防備施設を見ることが出来る。特に花岳寺周辺は市街地景観重要建築物もあって景観に優れている。
177	旧姫路街道(百目塚)	●	2 3 4 27 29 32	●						豊臣秀吉が毛利攻めをした際に整備された道が、池田家時代に土手道として整備され、後の姫路街道となった。しかし浅野時代には中材を経由するルートが主要道となり、かつての道は「有年道」となった。浅野時代には東側に新たに新土手が築かれ、土手としての役目も終えたが、旧上水道の導水路がこの土手に沿ってあったため、現在まで道として残されたと思われる。
178	旧黒谷道	●	2 4 27	●						旧道名。浅野長直が赤穂城下町を整備した際の関連文書「年々御侍屋敷其外色々御用定覚」には万治3(1660)年に「黒谷道」となるとの記載があり、その頃に整備されたと思われる。現在も一部のルートが残っている。
179	山崎山	●	36	●						JR播州赤穂駅の北側に位置する。別名「お大師山」と呼ばれ、八十八ヶ所石仏があるほかツツジの名所として知られる。

赤穂・城西地区の歴史文化遺産一覧 (6)

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化						解説	
						1	2	3	4	5	6		
180	取揚島	●			4 36	●	●						千種川河口先の播磨灘にある3,562㎡の小島。江戸初期に播磨国と備前国との間でこの島の領有権争いがあり、幕府が取り扱ったことによる。この島の東を播磨、西を備前領と定められた。現在も島上の石標から瀬崎海岸に建つ国境石を見通した海上線が岡山・兵庫県境である。往昔の景勝地。
181	熊見川(加里屋川)	●			4	●	●	●					加里屋川の旧称。かつては高瀬舟等の交通のため尾崎川(現在の千種川の流れ)の水を亀の甲で堰き止めて熊見川を主流としたが、明治25(1892)年の大水害後、亀の甲は撤去されて今の流れとなり、熊見川は川幅が狭められて加里屋川と中広川となった。加里屋川の護岸には、現在も雁木の痕跡が残されている。
182	加里屋川護岸	●			4 27	●	●						かつての熊見川の護岸にあたり、絵図によれば景観を重視した整備が行われて現在も新しい雁木が加里屋川の景観に役を買っているが、古絵図に見られる位置にも雁木痕跡が残されている。
183	旧尾崎川	●			2 27	●							現在の千種川の旧河川名。かつては亀の甲によって川が堰き止められて熊見川(現在の加里屋川)に多くの水が流れていたが、明治25(1892)年の大水害後に亀の甲は撤去され、尾崎川が主流となり、千種川となった。
184	新川	●			27 30 35	●	●	●					かつて赤穂城の南から西方へ流れていた狐川が、塩田開発に伴って水路を整備されたもの。旧日本専売公社赤穂支店の南側を流れている。赤穂城築城に際し「コクスケ」という狐が妨害をし、狐川の名前を付けさせたこと、城内に国助(くすけ)稲荷があることを伝えた昔話がある。(赤穂の昔話)
185	旧長池	●			2 4 32	●	●						中世に加里屋古城から西方方面への街道は自然堤防上にできたと考えられ、江戸時代には備前街道となる。池田時代、備前街道の南側に沿って東西に長い池があり、長池と呼ばれた。浅野時代には長池は埋め立てられて町家となり、現在は水路のみとなっている。
186	旧上広門村	●			2 32								旧集落名。『播州赤穂郡志』によれば中村(現在の中広)の北側にあったが、享保12(1727)年にはすでに中村の内に入っていたという。
187	旧下広門村	●			2 32								旧集落名。『播州赤穂郡志』によれば中村(現在の中広)の北側にあったが、元禄年間(1688～1704)の洪水を難を逃れて家を中村に移したという。
188	旧中村(中広)	●			2 4 27 29 32	●	●						旧集落名。中広(中村)は大川の河口部に堆積した中州上に成立した集落である。15世紀頃は中庄といわれ、千種川河口の港町として繁栄したことが『兵庫北関入船納帳』よりかがわれる。播磨六坊のひとつ永徳寺が開かれ、市城南部の中世文化の中心地であった。明治25(1892)年の大洪水による千種川の大改修後に中村と広門村が一つになり、大正15(1926)年に中広と改称した。
189	赤穂市立歴史博物館	●			1 3 4 28 30			●	●				かつて赤穂城に隣接してあった米蔵の場所に位置し、赤穂の塩、赤穂の城と城下町、赤穂義士、旧赤穂上水道の4テーマにもとづき、赤穂の歴史と文化を紹介する。平成元(1988)年開館。
190	赤穂情報物産館	●			4			●					加里屋お城通りに面した立地であり、多種多様な地元の特産物を集めて販売する。販売スペースの1階部分には定番の塩味まんじゅう、塩をはじめ漬物、陶器、絵はがきなど約150種類が並ぶ。
191	赤穂玩具博物館	●						●					大正時代後期に建築された古民家を活用し、昭和30～50年代を中心とした玩具を展示する私設博物館。
192	赤穂緞通加里屋工房	●						●	●				赤穂緞通の技法継承のために平成3(1991)年から開催された市教育委員会の講習会以後、市内各地につくられた赤穂緞通工房の一つ。
193	赤穂緞通いらか工房	●						●	●				赤穂緞通の技法継承のために平成3(1991)年から開催された市教育委員会の講習会以後、市内各地につくられた赤穂緞通工房の一つ。
194	グリーンベルト	●						●					塩田跡の工業地帯と住宅地域との間の公害緩衝緑地事業としてつくられた、総延長4kmの緑地帯。昭和43(1968)年に着手、昭和52(1977)年4月に工事完成。
195	義士モニュメント(噴水)	●			1			●					息継ぎ井戸西側にあり、四十七士の義と勇にあふれる心を顕彰するため平成13(2001)年に造られた。制作は彫刻家の井田彪氏。
196	息継ぎ井戸	●			1 3 4 28			●					江戸で浅野内匠頭による刃傷事件の第一報を知らせるため、元禄14(1701)年3月14日の夕刻に赤穂藩士、早水藤左衛門、萱野三平が早駕籠で江戸を出発。赤穂城下に着いたのは3月19日の早朝。155里(約620km)の行程を4昼夜半早駕籠に揺られ続けた両人は、城下に入りこの井戸の水を飲んで一息ついたといわれ、以来、移転を重ねながらも、息継ぎ井戸と呼ばれている。
197	いきつき広場	●			1			●					息継ぎ井戸周辺は観光施設として整備されて広場となっている。広場の一角では、発掘調査で見つかった旧赤穂上水道が露出展示されている。
198	船入広場・船入跡	●			4 27			●	●				江戸時代になると、熊見川に接して赤穂藩の船入が築かれた。元禄期の絵図には船入北側に雁木や船奉行屋敷、水主屋敷、船頭屋敷が描かれている。森時代になると役目を終えて水田となり、現在はその一部が加里屋駐車場になるとともに、隣接して船入広場が整備されている。平成14(2002)年の発掘調査で、18世紀代の護岸石垣が確認された。
199	花岳寺門前広場	●			4			●					花岳寺の門前に平成16(2004)年に整備されたポケットパーク。赤穂や義士にゆかりのある「桜」をシンボル・ツリーとし、赤穂義士の討ち入り装束の入山形舗装など、地域住民のアイデアが活かされたポケットパーク。
200	お城通り	●						●					赤穂駅大石神社線(みたと銀行～赤穂城大手門前)の愛称。平成10(1998)年に市街地景観形成地区に指定され、城下町をモチーフとした街路整備が実施された。
201	三味線製作技法			◎									赤穂市内において三味線の全工程を一貫製作する技術を持つ日坂進氏を赤穂市選定保存技術保持者に認定している。
202	加里屋・仮屋	●			2 4 29 36			●					地名。千種川河口西側のデルタ上に位置し、赤穂市役所をはじめ、行政機関の所在地。加里屋村は明心・永世(1492～1521)年頃に雄鷹山の西、黒谷・長尾・山下の加庄村の農民が耕作・製塩を営むために山下の南へ上町あたりに仮り屋をつくって移り住んだのに始まるという。かつての侍屋敷は上仮屋、町家は加里屋と呼ばれている。
203	黒谷	●			32			●					地名。黒と呼ばれた城下町北方の谷であり、現在も黒谷へ通じる黒谷道が一部残されている。
204	橋本町	●			36			●					地名。かつて長池にかかる橋があったことから名付けられた。中世加里屋古城の搦手にあたるとされる。浅野長直が慶安2(1649)年に埋め立てた。
205	磯	●			36			●					地名。森時代初期に開墾した塩田。
206	西沖	●			36			●					地名。加里屋川沿いの沖積地。大正6(1917)年頃より耕地整理事業で整備された敷地。
207	東沖	●			36			●					地名。西沖と同様で、加里屋川東側の沖積地。
208	千鳥	●			36			●					地名。千種川河口の砂洲が発達して千鳥島が遊ぶ砂浜であった。戦前の耕地整理事業、戦時中は軍需工場の立地、戦後は開拓組合によって高潮堤防が築かれ宅地化が進んだ。
209	農神	●			36			●					地名。農神西・農神東とある。森時代に農神社(備中西江原神社からの分神。明治43(1910)年に天満神社に合祀)があり、農神道といった。昭和53(1978)年3月1日に新設して農神町となる。
210	六百目	●			36			●					地名。塩屋の上田で一反600目の値打ちによる。
211	三樋	●			3			●					地名。三ツ樋元は池田時代の古塩浜。片浜・加藤・新川の三樋門があった。三ツ樋浜は三ツ樋元に続く安永9(1780)年の開浜。
212	山鹿素行による二之丸虎口の改変	●			1 2					●			赤穂城二之丸門は、軍学者・山鹿素行によって二之丸虎口の改変が行われたとされており、平成14(2002)年の発掘調査で実際に改修痕跡が発見された。
213	赤穂義士祭	●			1				●				明治36(1903)年から、討入があった日の12月14日に開催されている催事。忠臣蔵パレードと称し、市内小学生による金管バンド、東映剣会による「殺陣」、赤穂義士娘による「義士娘入道中」、「大名行列」、忠臣蔵ゆかりの人物に扮する「義士伝行列」、忠臣蔵の7つの名場面を演じる「山車」、泉岳寺へと向かう四十七義士に扮した「義士行列」と続き、多くの観光客でにぎわう。